

高等教育における科学と哲学：

アジア・イスラム社会の視点 —その2—

杉 本 均（高等教育教授システム開発センター）

(3) 複合社会マレーシアのイスラム化

ロンドンで出版されているイスラム関係の月間雑誌『アラビア (Arabia)』1986年11月号は、近年のマレーシアにおける比較的穏健なイスラム化のアプローチをとりあげ、「我々の時代に見いだすことのできる、イスラム国家のモデルに最も近いものである」と評した。それはさらに次のように続けた：

「マレーシアは適度に繁栄し、高度に民主的な国家であり、人種的調和と国内治安のモデルでもある。それはまた徐々にではあるが、理想的なイスラム国家という目的に向かって確実に進歩しつつある国である。人口の半数が非イスラム教徒であるこの国は、このモデルを実現するにおいて、積極性を増し、ますます勢いづいている⁽¹⁾。」

マレーシアはイスラム教徒の地理的な世界分布から見ても、また国内の宗教比率（イスラム教徒人口53%）から見ても、非イスラム社会（もしくは世俗社会）との接点にあたるいわばフロンティアに位置している。中東のイスラム国家やイスラム社会で普通に行われている制度・慣行も、マレーシアではすべて他宗教や近代世俗社会の制度・慣行との接触を想定しての説明、調整、修正が必要とされることになる。それだけにマレーシアのイスラム運動も各派の間の論争だけでなく、すぐ隣に接する世俗社会や他教徒との関係を念頭において、どこまで許容するか、あるいは完全に隔離する方向に向かうかという、理論的・実践的な緊張と複雑性を伴っており、それがマレーシアのイスラム運動の興隆を逆に支えてきた側面も無視できないであろう。

マレーシア政府は1980年代以降、マハティール (Mahathir Mohammad) 首相の指導のもと、いくつかの世俗の機関とは別にイスラム的機関を並行的に設置する、穏健な形のイスラム化に着手してきた。イスラムに基礎をおいた価値を志向する社会に向けての意志表明は、1986-90年の第5次マレーシア計画に、国家の発展計画へのイスラム的価値の完全な包摂を求める要請として初めて織り込まれ、教育の分野では1988年にはイスラム的精神の浸透を目指す『国家教育哲学 (Falsafah Pendidikan Negara)』も宣言された⁽²⁾(前出)。

西洋の科学技術の発展は人類の物質的生活水準の向上に著しい貢献をもたらしたが、精神的平和の達成にはいまだ満足にほど遠いものといわざるをえない。イスラム科学者はこの両者は表裏一体のものとして達成されねばならないと考えた。イスラム高等教育および研究においては、無目的・価値中立的な研究や知識の追究は認められず、聖クルアーンとハディースの明示する、安寧でヒューマニスティックなイスラム原理に導かれた世界の実現という、究極の目的に貢献するものでなくてはならない。マレーシアの国際イスラム大学の学長アブドゥルハミド・アブスレイマン (Abdul Hamid A. Abu Sulayman) は次のように述べている。

「知識と思想の分野で西洋が達成した優位は純粹に知の (intellectual) レベルにおいてであって、聖なる啓示 (Divine Revelation) とは全く無関係であることは明らかである。西洋の研究者は実験科学の分野ですぐれた業績を残したにもかかわらず、彼らは西洋社会に著しい不適合と不均衡が存在していることを否定できない。これは社会的な福利と個人的な欲望や利益の追求の間に起こる葛藤に、実証的方法では対処できないからである⁽³⁾。」

イスラムは「知識」の追求そのものを信仰行為と見なし、「知識」は「神の執事であり下僕である人間」の使命を遂行する重要な決定要因と考えている。「知識」によって、知恵と正義と敬虔さがもたらされ、神の存在の認識も導かれる。それゆえ「知識」の追求および伝達の場合として、教育は決定的に重要なものと見なされ、それを媒介する教師は、「知識」の伝達者として尊敬されることになる。そして社会のイスラム化には、この教育のイスラム化、すなわち「知識のイスラム化 (Islamization of knowledge/disciplines)」は避けて通れない課題となる。前編にて検討した「イスラム科学 (Islamic Science)」に関する議論は、「知識」と教育をイスラム化するために必要な教育内容

であり、また科学、学問、研究、文明などをめぐるイスラムの観点、根本的な原理、世界観を凝縮させたエッセンスでもある。元国際イスラム思想研究所 (International Institute of Islamic Thought=IIIT) 長、アル・ファルキ (al-Faruqi, Ismail Raji) は聖俗教育制度の統合を主張している。

「イスラム教育システムには初等・中等レベルのマドラッサや高等教育レベルのクリヤ (kulliyah) やジャミア (Jamiah) があるが、これらは世俗の公教育システムや大学と統合されるべきである。それによって両者の長所、すなわちイスラム的ビジョンと国家による財政的裏付けを新たな統合システムに備えることができる。ムスリムの生徒や学生の教育を非ムスリムの教師に託すという事態は継続されるべきことではない⁽⁴⁾。」

マレーシアをはじめとする各国でのイスラム教育制度の改革の動きは、1977年にサウジアラビアのメッカで開催された、第一回イスラム教育に関する世界会議 (First World Conference on Islamic Education) に大きな刺激を受けている。マレーシアはこの会議に積極的に参加しただけでなく、マレー人イスラム哲学者アル・アッタス (Syed Muhammad Naquib al-Attas) 教授はこの会議の提唱者のひとりであり、彼の思想は会議の中心的な位置を占めていた。そこではイスラム教育の目的が次のように決議された。

「教育は人間の精神、知性、合理的自己、情操、肉体感覚の訓練によって、バランスの取れた全人格的成長を目指さなくてはならない。(中略) 教育は人間の内面に、アッラーの真の執事として自己と宇宙を統治するための、創造的な刺激を喚起すべきである。そのためには自然と対決し葛藤するのではなく、自然の法則を理解し、その力を自然に調和した人格の成長に利用することが必要である⁽⁵⁾。」

マレーシアの政府与党、連合党 (Barisan Nasional=National Front) は、主として3つの穏健な民族別政党の連合体からなっている。すなわちマレー人による統一マレー人国民組織 (United Malay National Organization=UMNO:アムノ)、華人による馬華公会 (Malayan Chinese Association=MCA)、そしてインド系によるマラヤ・インド人会議 (Malayan Indian Congress=MIC) 他であり、この3党で連邦議席192のうち110を占めている (1995)。野党にはマレー系イスラム政党である汎マレーシア・イスラム党 (Parti Islam Se-Malaysia=PAS)、華人系の民主行動党 (Democratic Action Party) などがある。

マハティール現首相は1970年までのUMNO黨員時代は極右マレー (ultra-Malay) として知られ、その著作はいまだ未成熟な民族関係に有害であるとして発禁処分を受けた人物であったが、1981年の首相就任以来、国家機構の近代化と効率化とともに、マレー人の地位の向上とイスラム的価値の浸透に尽力してきた。とりわけ、1983年マレーシア・ムスリム青年同盟 (Angkatan Belia Islam Malaysia=ABIM) の指導者であったアヌワール・イブラヒム (Anwar Ibrahim:現副首相) を内閣に迎えて以来、数多くのイスラム化政策を実施に移してきた。そのなかのひとつが「政府機構のイスラム化 (Islamization of Government Machinery)」政策である。

「(政府機構の) イスラム化とは政府にイスラム的価値観を植え込むことである。このような教化は国家レベルでのイスラム法の導入とは同じものではない。イスラム法はムスリムのための法であり、いわば私的な法である。しかし国家の法律は、イスラムに基礎を置いてはいないが、イスラム的原理に反する形で運用されてはならない⁽⁶⁾。」

UMNOは複合社会の政権党として、野党PASやその他民間イスラムグループの「イスラム国家」政策や理念とは距離を置き、公式に「イスラム国家」への移行に言及したことは一度もなかった。しかし近年UMNOはイスラム主義化の度合いを深め、1983年には自らはマレーシア最大のイスラム政党であることを宣言し⁽⁷⁾、1988年には首相が「マレーシアのイスラム政府 (Malaysia's Islamic Government)」という表現を使い⁽⁸⁾、同年末には、首相自ら、講演で過激なイスラム主義とイスラム原理主義は異なることを説いたうえで、自分自身も「イスラム原理主義者」であると公言するに至った⁽⁹⁾。

マレーシアの外交政策にも1980年代以降、親イスラム政策が反映され、例えば1983年には、政府はこれまでマレーシアの基本的な2つの外交軸であった英連邦 (Commonwealth) と非同盟諸国 (Non-Aligned) という位置づけの上位に、イスラム諸国機構 (Organisation of Islamic Countries) を置くことを宣言した。また1992年以降、ミャンマー、ボスニアなど世界各地のイスラム教徒抑圧政策を取る国家に対する抗議活動を行い、さらに1993年、マハティール首相は正式にイランを訪問し、全地球的なイスラムの統合と団結の促進に同意したことなどはその例である⁽¹⁰⁾。

マレーシア副首相アヌワール・イブラヒムは次のように語った：

「今日我々が直面している問題の一つは、我々の教育システムにはイスラムについての統一されない見解が混在していることである。我々のシステムでは、理科や数学といった『世俗』の科目に、イスラム的教育概念や価値観がまだ十分に取込まれていないと言えない。我々はまた、イスラム文明やイスラムの様々な側面に関する教科書といった、基本的教材や設備に欠けており、イスラム的視野を持った大量の教師の養成も必要である。私が文部大臣を務めていた頃から徐々に事態は改善されてきているが、我々の教育システムにはさらなる変革が必要である⁽¹¹⁾。」

マレーシアのイスラム教育者もしくはイスラム主義者にとって最大のディレンマもしくは懸案は、イスラム教がマレーシアの国教でありながら、イスラム教育やその改革運動が独立以来常にマレーシアの公教育制度やその改革の周縁的な事項としての地位しか与えられてこなかったことであった。イスラム教育はマレーシアの教育制度に早くから取り入れられてきたが、それは非イスラムの学生が道德教育を受けている時間に⁽¹²⁾、分離された教室でイスラム教徒の学生だけが学ぶもので、その内容も多くはイスラム主義者からは、イスラムの儀礼的・知識的側面に片寄っていると考えられてきた。しかも学生・生徒が一步イスラム教育のクラスを出れば、そこはクルアーンもシャリアもない世俗の社会で、進化論や人類の起源などの特定のトピックは近年慎重に避けられてはいるが、一般的には西洋合理主義と物質主義に基づく「科学」が、大学であれば、経済学、法学、生物学、物理学といった科目の名のもとに教えられており、学生・生徒はその要求にあわせてレポートを書き、試験の設問に答えなければならない。これはイスラムの再興運動の高まりのなかで、多くのイスラム主義者や教育者のいらだちとなっていた。

(4) マレーシアのイスラム教育の展開と復古主義的運動

マラヤの伝統的イスラム教育

マラヤ・マレーシアにおけるイスラム教育の歴史を論ずることは本稿の目的ではないが、イスラム教育と世俗教育との接触という観点から簡単にその概略をみてみたい。マレー半島へのイスラムの伝来は、記録によれば15世紀初頭、アラビア文字の碑文から14世紀初葉にはすでにその影響がめられるが、原初的なイスラム教育はそれとともに発生し、遅くとも16世紀には、イスラム寺院マスジド (masjid) で行われる宗教教師の訓話や聖クルアンの朗唱、アラビア語・文字の読み書きの教授という形で行われていた。より組織的な学校形態を取るのは、おそくとも19世紀初期のポンドク (pondok=小屋) 私塾が、さらに20世紀初頭にはマドラッサ (madrasah) と呼ばれる教育施設が各地に成立してからである⁽¹³⁾。

ポンドクとは宗教教師の家の周囲に各地から集まった生徒が小屋を作り、師と寝食・労働を共にしながらクルアーンやスーフイー⁽¹⁴⁾の儀式を習う私立の寄宿塾であり、マレー半島ではマラヤ北部州および南部タイに多数みられた。教育内容としては初級レベルのポンドクでは上記の聖クルアンの学習に加えて、イスラム法 (Fiqh)、神の唯一性 (Tauhid)、朗唱法 (Tajwid) および歴史 (Sejarah) が教えられ、上級レベルのポンドクではさらに 注釈学 (Tafsir)、伝承 (Hadith)、アラビア語統語論 (Nahu)、同文法 (Saraf)、イスラム神秘主義 (Tasawuf: スーフイー) といった課目がカリキュラムに加えられた⁽¹⁵⁾。

マドラッサはアラブ系商人からの寄付金で建てられた校舎をもつ寄宿学校で、アラブ起源の宗教学校の形態を取り入れ、アラブ人教師などによるアラビア語・イスラム教育が行われるようになった。最初のマドラッサは1915年ペナンに開設されたマドラッサ・アル・マシュール (al-Mashhur) であったが、マドラッサの多くは中等レベルの教育課程 (上級課程) も持ち、カイロのアズハル大学を初めとする海外の高等教育機関への進学道が残されていた。藤本 (1966) は1936年設立のケダ州マフムド・カレッジ (Mahumud College) の専門中等課程と上級課程の教授要目 (カリキュラム) を伝えているが、それによれば、上級課程では上記イスラム課目 (5 課目週480分) に加えてアラビア語課目 (統語論に加えて作文 (insha)、読み (mutala'a)、そして修辞学 (balagha) の 4 課目週440分)、さらにマレー語、英語、歴史、アラビア文学史、イスラム哲学、心理学 (6 課目あわせて週520分) といった一般課目も教えられており、いわゆる統合型教育 (イスラム神学と一般世俗課目) の形態をなしている⁽¹⁶⁾。

英国の植民地教育政策の観点から見た場合、イスラム教育は正規の教育とは見なされず、元ミッション系の英語学校ではもちろんのこと、マレー語母語学校においても、課程外のアフタヌーンクラスとして暑い午後に行われたにすぎなかった。これはコーラン学校の普及している農村で、世俗学校に生徒を集めるための手段として設置されたもの

で、1872年のスキナー報告によれば、「コーラン教育は正規課程から厳格に分離され、その教育にかかる教員給与外費用はそれを希望する両親が負担すること」と勧告されている⁽¹⁷⁾。中等教育レベルでは唯一のマレー語教育機関であった、スルタン・イドリス教員養成カレッジ (Sultan Idris Training College) の1936年のカリキュラムに、週あたり2時間(計90分)の宗教教育 (religious instruction) が成績外の科目として割り当てられていたのが数少ない例であり、しかも当局からはそれを廃止するよう勧告が出ていたという⁽¹⁸⁾。独立直前の1956年に英領マラヤ連邦政府から補助を受けていた民間のアラブ・イスラム宗教学校は452校、51,063人が在籍していたが、それ以外に補助を受けない独立宗教学校も相当数あった⁽¹⁹⁾。

独立マレーシアの公教育とイスラム教育

1957年のマレーシア連邦独立以来、政府は英語、マレー語、華語、タミル語媒体の各世俗学校を国民学校および国民型学校に編成拡大し、1967年までに学齢児童の91%までをこれらの学校に就学させることに成功した⁽²⁰⁾。国教とされたイスラム教の教育は、1957年の『教育令 (Education Ordinance 1957)』49条で、学校に15名以上のイスラム教徒がいる場合には少なくとも週2時間以上の宗教教育が正課として提供されることが明記され、これはそのまま『1961年教育法 (Education Act 1961)』の36条として成文化された⁽²¹⁾。これによって、イスラム教育は正式に公教育の一部となり、遅くとも1968年カリキュラムより非ムスリムの生徒が母語を学習する時間を用いて、週120分の「イスラム教育知識」が教えられるようになった⁽²²⁾。しかしこれによって従来の伝統的な民間ポンドク教育などが、公教育の補助的地位に陥り、次第に衰退してゆくことになる。

1977年、文部省は各地に点在した11の中等レベルの私立のイスラム宗教学校を政府の管轄に移し、新たに2校を新設した。1991年現在文部省は34の中等宗教学校 (Sekolah Menengah Agama) を運営しており、6,282人が学んでいる。これは中等1～3年までの生徒数の1.5%、学校数の2.5%を占めている⁽²³⁾。そのカリキュラムは宗教知識に人文科学、社会科学、自然科学を統合したもので、各種国家試験で他の世俗中等学校に比肩しうる学業成績をあげている、という⁽²⁴⁾。

高等教育におけるイスラム教育の流れは大きく2つにまとめられる。ひとつは私立もしくは公立のイスラム神学研究機関で一部はカリキュラムに一般科目の教育を取り入れたカレッジの流れ。もうひとつは政府の公教育システムの中の正課のなかに「イスラム文明」などのコースを設け、それを次第にムスリムの学生から、非ムスリムの学生の必修にまで広げてゆくという流れである。

マラヤ・マレーシアにおける最初のイスラム高等教育機関は、1955年スランゴール州、クラン市に設立されたマラヤ・イスラム・カレッジ (Kolej Islam Malaya) である。しかしこれは1971年に文部省の管轄に入り、マレーシア国民大学に吸収され、イスラム研究学部におけるイスラム法学、アラビア語、イスラム文明のコースとなった⁽²⁵⁾。マレーシア国民大学はイスラム教徒の学生が7割を越える⁽²⁶⁾とはいえ、12学部を擁する世俗の総合大学であり、上記コース以外では学生は西洋型教育を受けることになる。

近年のマレーシアの一部の大学および全教員養成カレッジにおける重要な展開として、「イスラム文明コース」を全学生の必修科目にしようという動きがある。これまでこのコースはイスラム研究科の学生にのみ提供されていたものであるが、文部省イスラム教育部によって、統合された将来のマレーシア社会への道を促進しようとする試みとして、新たにデザインされたものである。1977年から「イスラム文明コース」を提供してきたMARA工科カレッジ (ITM) を例外として、マレーシアのすべての高等教育機関は、内容や力点にはそれぞれの違いはあるが、1983年からイスラム文明のコースを開講している。とくに教員養成カレッジ、マレーシア国民大学 (UKM)、マレーシア工科大学 (UTM)、マレーシア北部大学 (UUM) のすべての学生はこのコースが必修である。マレーシア理科大学 (USM) においてはムスリムの学生に対してのみ必修である。マラヤ大学 (UM) とマレーシア農科大学 (UPM) ではこのコースを選択科目として提供している⁽²⁷⁾。

大学やカレッジレベルにおいて、「イスラム文明コース」がすべてのムスリム学生、そして一部の大学ではすべての学生の必修科目として導入されることは、イスラムが、アル・アッタスの言うように、「通常の意味での単なる宗教ではなく、マレー諸島において、重要な役割を持つ文化であり、文明である⁽²⁸⁾」ということを見ると、例えば他の「ギリシア文明」や「アジア文明」といった科目の導入とは全く別の意味を持つことになる。「イスラム文明」論は西洋近代文明の物質主義的 (資本主義的・共産主義的) な価値論・世界観に対して、アッラーの導く精神主義的な

イスラム理想世界（ウンマ：Ummah）や価値観の絶対優位を説く理論であり、本来ならば非ムスリムの学生にとっては単なる過去の文明史の学習という認識を越えて、自己のアイデンティティや人生観にまで深刻な影響力を及ぼし得るコースである。

しかし現在のところ、大部分の機関では、このコースに十分な教員を配置できず、他の専門の教員の片手間仕事や回り持ちの授業となっており、関係教材の不足や毎年繰り返しの多岐選択問題による評価などの問題が多く、コースそのものを評価する段階に至っていないという状況である⁽²⁹⁾。

ダックワ（伝道）運動とイスラム教育

以上のような世俗公教育機関における一部の教育内容のイスラム化の動きには別に、民間の宗教グループや運動の側からもイスラム教育参入への積極的なアプローチが行われてきた。そのなかでも最も顕著で積極的な活動を行ってきたのが、マレーシアのいくつかのイスラム伝道グループ（ダックワ=dakwah/da'awah:invitation to Islam）で、民間レベルでのイスラム原理主義、復古主義運動の中心となってきた勢力である。ダックワ運動はイスラムの原点を目指す運動、すなわち、絶対神アッラーと預言者ムハマッドの言葉と行動にできるかぎり忠実に生き、その時代の生活様式を再現し、普及させ、ひいてはムハマッドとその追随者の時代に存在したという、イスラム国家（Islamic State もしくは Islamic Republic）を現代に再興させようという運動である⁽³⁰⁾。

マレーシアのダックワ運動はその運動主体、政治性、規模と組織性、活動地域によって様々な特徴があるが、代表的なものとしては、①マレーシア・ムスリム青年同盟（Angkatan Belia Islam Malaysia=A B I M:アビム）、②イスラム共和国運動（Ripublik Islam :P A S 系列）、③ダールル・アルカム（Darul Arqam）、④ジュマア・タブリー（Jama'ah Tabligh=group of transmission:伝道集会運動）、などがあげられる。ダックワ運動そのものに関しては多くの研究があるので、ここでは各運動の教育活動に注目してその概要を見てみたい。

①マレーシア・ムスリム青年同盟（A B I M）

第一のマレーシア・ムスリム青年同盟（A B I M）は1969年の民族暴動を契機に都市部の学生運動を中心に興ったイスラム原理主義運動で、その政治的志向の強さのゆえに知識人、学生、公務員、労働者などを中心に約50,000人の組織と大きな影響力を誇る最大のグループである⁽³¹⁾。イデオロギー的には前出のイスマイル・アルファルキの影響を受け、「知識のイスラム化」に大きな関心を寄せ、教育を通じてのマレーシア社会の緩やかなイスラム化を目指し、非ムスリムにもその生活様式を伝道しようと働きかける点が他の運動と異なっていた。政府のイスラム政策に批判的でありながら、議会に親政党を持たないこともP A S = I R 運動との違いであったが、1983年の指導者アヌワール・イブラヒムのUMNOへの離脱によって、内部に分裂の傾向が生まれてきている。

A B I Mは知的イスラム運動として教育を重視しており、その公教育プログラムには教育とは「アッラーへの信仰と柔順に基づいて、知的、精神的、情緒的、肉体的にバランスよく統合された人格を生み出そうとする絶え間無い努力である。そしてそれは、善行をもって啓蒙され、神の執事、代理人としての責任感にあふれ、イスラム社会実現に貢献できる人格の育成を目指す⁽³²⁾」と述べられている。そのための最も重要な仕事は、世俗的な教育システムをイスラム的枠組みに適合するよう再塑型することである。

A B I Mは1971年に同胞基金（Yayasan Anda）によってイスラム中等学校を設立し、通常の連邦教育システムからこぼれ落ちた貧困層の子弟を救済し、イスラム知識を与えようとした。この奨学金によって、1974年マラヤ大学にベール（mini-kelekung）をまとった最初の女性が入学した⁽³³⁾。またA B I Mは1982年から文部省が導入した新初等カリキュラム（K B S R）を「イスラムを完全な人生観」として認めていないとして、批判し、独自の代替イスラム学校と初等イスラム学校カリキュラム（Islamic Primary School Curriculum / Kurikulum Sekolah Rendah Islam = K S R I）を提案した。そのカリキュラムによると、教育の知識源は聖クルアーン、伝承（ハディース）、伝記（シッラ:sirah）とし、ムスリムの個人的義務科目（信仰原理、信仰実践、道徳）とムスリムの集団的義務科目（理科、数学、物理学、芸術）が区別され、その他に英語、マレー語、アラビア語が教えられるとされている⁽³⁴⁾。さらにA B I Mは1980年にイスラム幼稚園（TASKI-Taman Asuhan Kanak-Kanak Islam）を開設し、聖クルアーン、英語、マレー語、アラビア語などを教えた⁽³⁵⁾。

組織メンバーへのノンフォーマル教育の分野では、1972年にマレーシアで初めて小集団学習組織ウスラ（usrah）を導入した。A B I Mのウスラは5人から25人の集団（通例7人程度）からなる基本組織で、通常個人の家で会合を

持ち、聖クルアーン、ハディースの解釈や宗教的問題などについて議論する。これによって強固な同胞愛精神を育成し、知識の学習と蓄積、精神の鍛練を行い、組織・家族・社会への責任感を発達させることをその目的としている⁽³⁶⁾。ウスラではこれまでほとんどあるいは全く疑問の余地のない知識として講師から一方的に与えられてきたイスラム教育に、討論と合議という新しい学習プロセスを持ち込んだ意義が大きい。なおA B I Mは1986年より『イスラム教育 (*Jurnal Pendidikan Islam*)』という雑誌を発行している⁽³⁷⁾。

②PAS/イスラム共和国グループ

第二の運動団体であるイスラム共和国 (I R) グループは、イスラム政党PASに指導される (連携する) 団体で、1970年代中頃から主として大学などのムスリム学生団体や自治会などでA B I Mと勢力を争い、1980年代中頃にはマラヤ大学を始めとする多くの大学で最大の影響力を持った。きわめて政治的志向が強く、PASと同様に、現行の世俗のマレーシア政府は法的に無効であって、文字通りイラン型のイスラム共和国を建設するべきである、と主張している。

イスラム共和国とは、様々な定義がされるが、一般的には預言者マホメッドが紀元622年にメディナに聖遷してからの『メディナ憲章』に導かれた時代をひとつの理想とする。さらには過去のサファビー朝ペルシア、インドのムガル帝国、オスマントルコ、そして現在のイラン・イスラム共和国をそれに近い模範とみなすこともある。マレーシアでは1990年の総選挙他でイスラム政党PASがクランタン州をおさえ、同州を「イスラム国家 (Islam State=イスラム州)」とする計画を宣言した。さらに国外より専門家を招き、イスラム刑法 (hudud) を導入する可能性について検討し始めた⁽³⁸⁾。

イスラム共和国 (I R) グループには、マラヤ大学などのイスラム研究科の教授も積極的な関与をし、また英国留学から帰国したメンバーが、より厳格なエジプトのムスリム同志会 (Ikhwan Muslimin=Muslim Brothers) やパキスタンのイスラム伝道 (Jamaati-i-Islam) の影響を受けていたこともあり、急進的な主張を掲げて大学当局と交渉した。例えば、男女が一緒に参加・観戦するすべての大学の催しやスポーツに反対し、一部の大学祭企画やロック・コンサートのボイコットを呼びかけた⁽³⁹⁾。

I Rグループや学外のPASはやはり15人から20人の規模でのウスラ学習集団を導入し、出席を義務づけているが、メンバーは自派のイスラム理論以外の理論や潮流については知らないか、受け付けない場合が多いという。一方農村・近郊のポンドック塾の90%はPASのコントロールにあるといい、その教育方針は「全科目はイスラム的であり、世俗的な名を持つ科目は持たない」とされた⁽⁴⁰⁾。またPASは北部4州にPAS T I と呼ばれるイスラム幼稚園 (PAS Tadika Islamiyyah) を設立し、聖クルアーンとハディースの暗記に力点を置いた伝統的パターンの教育を行っている⁽⁴¹⁾。

③ダールル・アルカム

ダールル・アルカム (Darul Arqam: House of Arqam) は1969年に宗教講師アシャアリ (Ustaz Ashaari Muhammad) によって結成されたイスラム実践運動で、ムハマッドが最初のイスラム革命を目指して隠遁したメッカの隠れ家の名に由来している。運動の最大の特徴はムハマッドの時代の生活様式を実践しようということにあり、マレーシア各地に10,000人以上といわれるメンバーにより自給自足に近い45の共同体を作り上げ、世俗世界からの完全な隔離を目指している。組織は自己充足を組織のスローガンとし、15の医療センターとハラール (許可された) な食物を生産する食品工場までも備えている。メンバーはムスリムの義務のうちの個人的義務と祈りを重視し、政治的な色彩は薄いとされてきた。しかし主宰者のアシャアリにはスーフィー神秘主義の傾向があり、自らを預言者マフディと称したという理由などで、1994年政府によって集会と出版広報活動の停止を命じられた⁽⁴²⁾。

ダールル・アルカムの教育活動は、その自給自足的な方針を受けて、幼稚園から中等教育までを自前で準備しようという努力を行っている。ダールル・アルカム側の統計によれば、1991年には128の幼稚園、53の小学校、12の中等学校を運営し、そこでは7,942人の児童生徒が学んでいるという。そこではムスリムの個人的義務である、道徳性の涵養と聖クルアーンの記事に重点がおかれており、集団性 (Jama'a=group) を重視するゆえに、小学生から男児はターバン (taj) とシャツ (jubbas)、女兒はマレー服にベールといった制服を身につけている。ダールル・アルカムの学校のカリキュラムは一部は政府のシラバスに従い、宗教科目とアカデミック科目を統合していると主張されているが、実際には聖クルアーンの記事と自派の教義に大きな力点がおかれ、また組織としてビジネス活動に乗り出して

からは、職業教育訓練が特に強調されているという。また12歳から16歳までの子供に聖クルアーン全章を暗記させるイスラム学者養成コースもあり、しばしばアラブ諸国の大学に留学生を送っている。ソフィ・ロアルドの観察によれば、その内容に「知識のイスラム化」などの最近のイスラム社会科学の影響は見られないという⁽⁴³⁾。

④ジュマア・タブリー運動

最後にジュマア・タブリー (Jemaah Tabligh=group of transmission) 運動とは文字通り訳せば伝道集会運動であるが、1920年代にインド・デリーの宗教教師マウラナ・イリアス (Mawlana Muhammad Ilyas) によって起こされた運動が、マレーシアのインド系ムスリムを通じて伝えられたものである。マレーシアでは1950年代頃からインド・パキスタン系ムスリムの間に静かに普及していた運動が、1970年代以降の世界的なイスラム再興の波にのまれて脚光を浴びるようになった。公務員や学生を中心に少なくとも5000人以上の運動支持者がいると見られている⁽⁴⁴⁾が、組織性がきわめて薄く、個人と個人の接触活動により学習ネットワークを拡大するが、イスラムへのアプローチは非政治的なものであった。

その活動は、同じ復古主義的運動においても、「Jemaah Tabligh がムハンマドの行動面を重視するのに対して、Darul Arqam はムハンマドの生活様式を重視する⁽⁴⁵⁾」と、中澤 (1989) が指摘したように、マルカス (markas) と呼ばれるモスクへの集会を定期的に行い、そこで集団礼拝と学習を行う。またしばしは行われる遊歴やモスク宿泊によって、布教を行うとともに、慣れ親しんだ環境からの隔離とイスラムの同志感情の高揚を目指している。

タブリー運動の教育活動は主としてノン・フォーマル教育に向けられており、メンバーによる街頭や個別訪問でのイスラムのメッセージ伝達、モスクでの講話がその中心となる⁽⁴⁶⁾。Tabligh 運動の教育活動は、そのゆるやかな組織性と政治志向の薄さのゆえに、具体的な制度として形や記録に残るものは少ない。ナガタ (Nagata:1984) によれば、Tabligh 運動支持者による具体的な学校の設立としては1校が記録されており、そこでは運動組織からの使節が Tabligh 原理や精神を教えたとされるが⁽⁴⁷⁾、その教育形態はマレーシアのイスラム教育の歴史の中では伝統的なものと大きな差があるとは考えられない⁽⁴⁸⁾。

以上に見たとおり、民間のイスラム団体や伝道組織も、教育活動を重視し、様々な形で独自のイスラム教育を展開し実践してきたが、その中心はウスラなどのノン・フォーマル教育や初等もしくは就学前教育が主体であった。ABIMやダールル・アルカムなどは少数の中等教育機関を運営しているが、多くは資金的にも、教員配置のうえでも苦しい運営にあり、不安定な活動状態に陥るケースもあった。イスラム教育科目と世俗のアカデミック科目との統合については、多くの学校がイスラム的視点・方法論を一般科目にも取り入れるように努力していたが、「知識のイスラム化」運動と呼ばれる新しいイスラム社会科学思潮を明確に反映している実践例は、ABIMの一部の学校を除いて見られず、一部の団体ではむしろ社会的思潮から自らを隔離し、閉鎖的になる傾向が見られた。特に中等後の教育の継続に関しては事実上、外国のイスラム高等教育機関か国内の世俗大学に依存せざるを得ない状況であった。

世俗の公教育においてはイスラム教育科目は時間数や教員配置の面では独立後大きな改善が見られ、比較的安定した教育が可能となったが、ムスリムの生徒にとっては同じ学校のなかで受ける一般世俗科目の授業において、全く異なる世界観・科学観・哲学に直面することになる。他方、民間イスラム団体によるイスラム教育活動の場合は、一般的アカデミック科目を含める場合でも、イスラム的価値観に基づく統一カリキュラムを導入することが可能になるが、特に上級段階の教育においては、多くの場合それを運営する財源と教員の配置に限界があり、活動規模も限られたものとならざるを得ない、という問題があった。

このディレンマを解決するには、カリキュラム全部がイスラム的価値観・哲学に貫かれ、しかも政府等の公的財源によって運営される新しい高等教育機関を設立する以外にないことが、次第に明らかになった。1983年クアラ・ロンプル郊外のペタリン・ジャヤ市にマレーシア初の宗教大学である、マレーシア国際イスラム大学 (International Islamic University Malaysia: IIUM) が設立されたのは、まさにこうした状況においてであった。

(5) マレーシア国際イスラム大学の誕生

マレーシアにイスラムの視点からすべての科目を教授するイスラム大学を作ろうという構想はかなり以前から表明されていた。前出の国際イスラム思想・文明研究所 (International Institute of Islamic Thought and Civilization) 長のアル・アッタス教授は1960年代以降のマレーシアのイスラム再興の背後における、イデオロギー面の中心人物の一人であり、イスラム大学の構想者でもあった。

アル・アッタスによれば、知識とは、その定義、内容、目的、性質そして方法論のすべてにおいて文明の影響を受けており、知識の性質には文明の精神と性格が注入されている、という。従って西洋においてなされた知識の解釈は西洋文明の正確な反映であり⁽⁴⁹⁾、非西洋におけるその無反省な受容は、西洋による非西洋の植民地化の歴史とあいまって、知識における非西洋の西洋への降伏を意味している。その完璧に近い支配ゆえに、世界の多くの文明は西洋の定義する知識に次々に屈し、「知識の脱西洋化」は事実上もはや「知識のイスラム化」によってしか達成しえないほどに勢力を失っているという。アル・アッタスによれば、「知識のイスラム化」とは、まず人間を不可思議で、神秘的で、アニミズム的で国民文化的な伝統から解放し、続いて人間の理性と言語を世俗的なコントロールから解放することであるという⁽⁵⁰⁾。アル・アッタスは1970年代初期からイスラム大学を構想していたというが、その構想された大学とは次のようなものであった：

「その構造は西洋の大学とは異なり、何をもって知識とするかという概念も西洋の哲学者が考えるものとは異なっている。その目的と志も西洋の概念とは異なっている。高等教育の目的は、完全な市民を養成するという西洋の目的とは異なり、イスラムにおいて、完全な人間、普遍的な人間を養成しようとするものである。イスラムの学者はある特定の一学問分野の専門家なのではなく、その展望において普遍的であり、関連するいくつかの学問分野において権威をもつ者でなくてはならない⁽⁵¹⁾。」

アル・アッタスの思想は同研究所の助教授ワン・ダウド (Wan Mohammad Nor Wan Daud) を通じて、A B I Mの運動に大きな影響を与えた。両者はマレーの古典的なイスラム研究の系譜を引く哲学者・神学者であり、特にワン・ダウドはスーフィー神秘主義の影響も受けていたが、1980年代の「イスラム科学」の研究成果やシカゴ大学のファズル・ラーマン (Fazlur Rahman) らの近代的な見解の影響も受けている。従って、A B I Mの教育責任者であるガザリ・バスリ (Ghazzali Basri) によれば、イスラム大学はA B I Mのアイデアであるとも主張されている⁽⁵²⁾。

大学が現実のものとなる直接の契機は、先に述べたようにアル・アッタスが主導した1977年メッカにおける第一回世界イスラム教育会議の勧告を受けて、1982年1月、マレーシアのマハティール首相が当地への設立を提案したことによる。直ちに文部省は基本設立趣意書を作成し、8月には内閣の承認を得た。マレーシア政府は1969年の民族暴動以来、華人による中国語を教授用語とする大学 (ムルデカ大学) の設立要請を却下し、1971年の大学および大学カレッジ法 (Universities and University Colleges Act) によって私立大学の設立を原則禁止してきた。ところが新大学は政府と外国政府および国際機関の共同出資となるため、この法規に抵触することになる。そこで新大学をこの規制外とするために、1983年2月法規の修正案を提出し、国王の同意を獲得した。

1983年5月に大学憲章を制定し、同月20日マレーシア国際イスラム大学の設立が承認され、ペタリン・ジャヤ市 (Petaling Jaya) の旧マラヤ・イスラム・カレッジ跡地に臨時校舎が建設され、法学部、経済学部、経営学部の3学部でスタートした。この大学はマレーシア政府がスポンサーとなっただけでなく、イスラム諸国の政府やイスラム会議機構 (O I C) などの国際機関によって出資されていた。授業で使用される言語は英語とアラビア語である。総長は現副首相アヌワール・イブラヒムであるが、学長はサウジアラビアの学者で元国際イスラム思想研究所 (The International Institute of Islamic Thought = I I I T:アメリカ) の所長として、知識のイスラム化の推進に活動的であったアブドゥルハミッド＝アブスレイマン (Abd al-Hamid Abu Sulayman) である⁽⁵³⁾。

設立後1985年までにモルジブ、O I C、パキスタン、トルコ、リビア、エジプト、サウジアラビアと条約を締結し、マレーシア政府とともに恒久的な運営評議会 (Board of Governors) を構成している。大学の目的は次のように定められている。

- 1) 神聖なる預言者モハメッドの教えに始まる思想家や初期のイスラム学者の先駆的な業績に反映されている、知識と真実の追求におけるイスラム的伝統に合致した、学問の全分野における**イスラムの優越性** (プライ

マシー)を再確立すること。

- 2) 知識の追求を敬虔な活動と考え、科学的究明の背後にある精神を聖クルアンの教えに触発されたものと考え、学習のイスラム的概念を再活性化すること。
- 3) アッラーおよびその委託者の従順なしもべとしての自覚を持つ、イスラム的教育に専念する専門家を養成するために、タウヒッドとアッラーへの服従の精神にかなう知識を普及伝播させること。
- 4) 高等教育においてイスラム的理想世界(Ummah)への選択肢を広く拡大し、すべての形態でのアカデミックな達成において卓越性を究明する⁽⁵⁴⁾。

大学はイスラム神学研究を専門とする限定的な機関ではなく、高等教育における包括的な専門教育機関である。その教育はすべての分野においてイスラム的価値システム、イスラム哲学に基づく科学観が吹き込まれ、教授学習のすべての側面における基本的アプローチが提供される。大学は社会の要請を考慮して、しかるべき時期にそのコースを人文科学、医学部を含む自然科学分野に拡張する予定である⁽⁵⁵⁾。大学はその性格上国際的であり、イスラム的であるが、その他に次のような性格があげられる。

- 1) カリキュラムにはイスラム的な内容とアプローチが強力に吹き込まれ統合される。
- 2) イスラム文明、イスラム的生活方法(生き方)、イスラム価値システム、宇宙における神、人間の位置についてのイスラム的概念、といったコースがすべてのプログラムの基本的部分とされ、すべての学生の必修とされる。
- 3) 従って、知識と教育についてのイスラム哲学が、大学におけるすべてのプログラムの基礎を形成する。
- 4) 大学はマレーシア政府と他のイスラム諸国政府および国際機関との間に締結された条約によって出資される。それぞれの代表が運営評議会を形成し、大学の所有権はその評議会に属する⁽⁵⁶⁾。

世界的にはマレーシアの国際イスラム大学は初めての試みではなく、パキスタンのイスラマバード・イスラム大学(IIU)をはじめウガンダ、ケニア、インドネシアなどにはイスラム大学があり、またサウジアラビア、ジェッダのアブドル・アジズ王大学(King Abdul Aziz University)のように自然科学・工学を含めてすべてのコースをイスラム科学やイスラム文明に基づく統一的視点によって教えている大学がいくつかある⁽⁵⁷⁾。しかしマレーシアという環境や政治的背景を反映して、IIUMにはいくつかの特色も見られる。

マレーシア国際イスラム大学は男女共学で(女性が過半数を越える)、マレーシア内外をはじめ、イスラム諸国、そして教育におけるイスラム的アプローチの理解や人類の進歩に果たすイスラムの役割に関心のある非イスラム教徒の学生をも受け入れている。(女性はベールを着用することが条件となる)1995/96年現在、学部学生5,801名、大学院生942名(内教育ディプロマ・コースが455名、修士課程に476名、博士課程11名)が学んでおり、そのうち20.0%は世界77カ国からの留学生である。出身国別では上位はインドネシア、ボスニア、タイ、中国などで、約半数がアジアからであった。(図1参照)なお日本人は3名、うち女性1名であった⁽⁵⁸⁾。アカデミック教員は1991年現在、507名で、うち33.9%が世界28カ国からの外国人教員である⁽⁵⁹⁾。

国際イスラム大学では、学部にあたる言葉に Faculty の代わりに、全体性(Totality)を意味するクリヤ(Kulliyah)という言葉を使っているが、これはイスラム圏の高等教育機関では19世紀以来用いられているという。これは英語の college と同語源の可能性もあり、西洋の大学がそもそもイスラム高等教育機関マドラッサのパターンに基づいて形成されたという説を暗に示唆している⁽⁶⁰⁾。

国際イスラム大学に独特の学部としては、4つのクリヤのうちのひとつにイスラム啓示科学および遺産学部(Kulliyah of Islamic Revealed Knowledge and Heritage)があり、その下にアラビア語学科、コミュニケーション学科、英語学科、歴史および文明学科、イスラム啓示科学および遺産学科(IRKH)、哲学科、政治学科、心理学科、社会学および人類学科の9学科を擁している。イスラム啓示科学および遺産学科はそのなかでも最大の学科で、教授4名、助教授6名、準教授22名、講師27名、助講師20名の教員によって運営されている。教授、助教授、準教授32名のうち28名は博士号を持ち、その取得国は、英国6、米国4、サウジアラビア、インド(Aligarh)各3、エジプト(Al-Azhar)、パキスタン、カナダ、マレーシア各2、トルコ、元ユーゴスラビア(Belgrade)、イラク、オーストラリア各1で、西洋:東洋の比率はほぼ半々であった⁽⁶¹⁾。

表1 マレーシア国際イスラム大学 コース別在学学生数 1995/96年度 (女性:内数)

学位コース	予備	1年	2年	3年	4年	5年	合計
アラビア語		130 (92)	127 (74)	47 (25)	44 (25)		348 (216)
英語学		75 (58)	76 (62)	12 (10)	21 (19)		184 (149)
経済・経営 (1年用)*		306 (132)	60 (18)	8 (3)			370 (153)
会計学		└─┬─┘	└─┬─┘	└─┬─┘	└─┬─┘		287 (149)
ビジネス経営	74 (43)						
経済学			49 (27)	61 (38)	86 (45)		196 (110)
工学**		59 (16)	48 (17)	1 (0)			108 (33)
人間学		426 (270)	432 (250)	430 (258)	262 (147)	13 (4)	1563 (929)
法学		313 (146)	319 (132)	309 (127)	269 (122)		1210 (527)
イスラム法学***						34 (25)	34 (25)
イスラム科学		255 (141)	207 (127)	132 (85)	201 (131)	8 (6)	803 (490)
語学予備課程	339 (128)						339 (128)
合計	339	1560	1509	1236	1102	55	5801 (2950)

Source: Admissions and Record Division, IIUM, 提供資料, 1995/96

注: * 1年生用コースで 修了後 会計、ビジネス経営、経済の各コースに分属されるが、若干未修了者が残る。

** 1994/95年新設, *** イスラム法学は一般法学修了者対象の追加コース。

図1 海外留学生の出身地域別構成 (%)

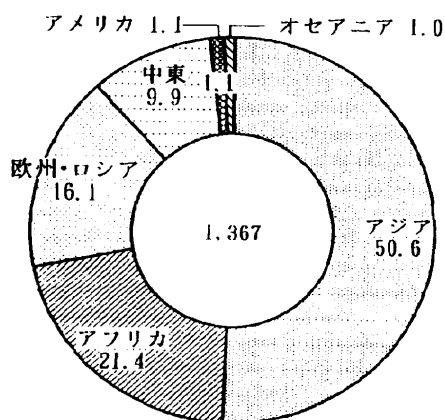


表2 海外留学生の主な出身国 (1995/96) (人)

インドネシア	203	パキスタン	30
ボスニア	104	ソマリア	28
タイ	96	インド	27
中華人民共和国	66	シンガポール	25
ロシア	60	タンザニア	25
バングラディシュ	58	フィリピン	23
アルバニア	42	ナイジェリア	21
アフガニスタン	40	ウガンダ	21
スーダン	34	ヨルダン	21
トルコ	34		
イエメン	33	日本	3
アルジェリア	31		
イラク	31	合計	1367

Source: Admissions and Record Division, IIUM, 提供資料, 1995/96, (図1、表2)

イスラム啓示科学および遺産学科 (IRKH) は、「『宗教的』科学と『世俗的』科学という二分法をタウヒード (唯一性) の原理を用いて克服する努力のための確固とした基礎を提供すること」を目的としている。学士号に必要な単位は、

- I 主専攻の必要単位
 - ①全学共通科目33単位 (11科目)
 - ②聖典注釈 (Tafsir)、伝承 (Hadith)、イスラム法及び法学 (Fiqh/Ulum al-Fiqh)、信仰簡条及び思弁神学 (Aqidah/Kalam)、伝道 (Da'wah) の5専攻各15単位 (5科から1専攻を選択)
 - ③その他6単位 (2科目)
- II 副専攻科目 人文科学科目から27単位 (9科目)
- III 補助科目18単位 (6科目)、選択科目18単位 (6科目)、語学8~10単位 (4~5科目)

となり、全体で125～127単位（44～45科目）となっている⁽⁶²⁾。

国際イスラム大学も他のイスラム教育組織と同じく、小集団学習組織ウスラ（usrah）を導入している。学生部はウスラを「イスラム教育の理解と実践のために、学生間の親密な協力を発展させる目的で組織される学生グループ⁽⁶³⁾」と定義しているが、すべての学生はいずれかのウスラに属し、毎週2時間のセッションに出席することが義務づけられている。参加者はこのコースでは単位を得ることはできないが、コースへの出席とそこでの活動や準備に対する評価は最終判定試験に加味される。ウスラは通常10名程度の学生からなり、学生部長によって任命されたリーダーがつく。学習内容は聖クルアーンやイスラム神学の各科目に加えて、イスラムの指導論や時事問題も題材となり、おしきせではない実質的な議論が要求される。義務制とされたウスラもマレーシアの国際イスラム大学の特色で、従来の伝統的で親密な小集団学習とイスラムにたいする論理的・「科学的」なアプローチの長所を兼ね備えたもので、パキスタンのイスラマバード・イスラム大学からの客員教授もこの制度の成功を評価し、「母国の大学にも大いに参考になる」と語っている⁽⁶⁴⁾。

国際イスラム大学のその他の活動としては、例えば1泊黙想会（qiyamat al-layl: 大きなグループでモスクに泊まり込み、神に祈りと礼拝を捧げる会）がある。この催しは個人の信仰を強化するだけでなく、教師と学生の絆を深めることを目的としており、夏休みには大学は同じ目的で信仰キャンプ（ibadah camp）を行っている。その他、大学の教師・研究者の仲間意識・協力関係も強く、西洋の大学の研究者どうしにしばしば見られるような、熾烈な競争関係による秘密主義や排他主義的態度が見られなかったという⁽⁶⁵⁾。

さらに大学院レベルの教育を行う研究所として、国際イスラム思想・文明研究所（International Institute of Islamic Thought and Civilization: I S T A C）が1991年に大学に付設された。研究所は自律的な機関であるが、ここで賦与する学位は同時に IIUM によっても認知されなくてはならない。所長に前出のアル・アッス、助教授にワン・ダウドといったマレーシアのイスラム主義哲学の第一人者を配していることから、この研究所が「知識のイスラム化」の理論・哲学上の一大拠点となる組織であることは明らかである。専攻領域としては、「イスラム思想」、「神学・哲学・形而上学・イスラム科学」、そして「イスラム文明およびその哲学・方法論・歴史」の3つのプログラムを持っている⁽⁶⁶⁾。

(6) 結 語

以上見てきたように、マレーシアにおけるイスラム教育の形態と内容は教育機関、教育レベルによって実に様々であり、近年の世界的なイスラム科学の再評価運動の影響は各所に見受けられるものの、その影響の度合や受容の形態はやはり教育機関の性格や思想的背景によって大きく異なっていた。さらにはマレーシアのイスラム教育の改革の思潮は、世界の様々なイスラム再興運動の潮流の影響を受け、とりわけ11世紀の神学者アル・ガザリ（Al-Ghazali）、IIITのアル・ファルキ、イスラム科学のいわゆる「正統派」サイド・フシン・ナスル（前編72-73頁）などはマレーシアでも良く知られた哲学者であるが、同時にアル・アッスやワン・ダウドのようなマレーシア出身の高名な神秘主義的イスラム学者の存在は、「知識のイスラム化」の運動という形でマレーシアのイスラム教育改革を特徴づけていたといえる。ひとつの教育機関の教育内容や性格をひとことで表現することには無理があるが⁽⁶⁷⁾、概略の展望を与えるためにマレーシアのイスラム教育をいくつかの指標で分類してみたのが表3である。

そのなかでも国際イスラム大学と国際イスラム思想・文明研究所の試みは、マレーシアのイスラム教育の歴史においても異色であるとともに、従来の教育制度の枠組みや資金的な限界を打ち破る、画期的な事業であったといえる。今後の発展、特に自然科学系学部の拡張には未知数の要素が多いが、従来海外に留学生を送り出すばかりの、学生輸出大国であったマレーシアの教育のイメージを変えるという点では、すでに大きな成果があったことは確かである。

しかしその国際性は同時にマレーシアの教育制度につきつけられた刃剣にもなり得る。国際イスラム大学は二つの点で、マレーシアのこれまでの基本的教育原理、教育政策に根本的変更を加えることになった。ひとつはマレーシアにおける初めての私立大学として設立されたこと、そしてもうひとつはマレーシア語ではなく、英語とアラビア語を大学の授業用語としたことである。複合社会マレーシアの独立以来の最優先国家政策は国民統合と経済的発展であった。マレーシアにおいて、華人からの長年の請求を退けて、中国語による大学の設立を禁止してきたのも、国立大学における英語の使用を制限し、大学院に至るまでマレーシア語による授業を行うよう努力してきたのも、外来の要素

表3 マラヤ・マレーシアの中・高等教育機関におけるイスラム教育 (杉本)

学 校	授業用語	一般科目	イスラム文明	イスラム科学	イスラム神学	イスラム知識	コーラン読誦
ポンドク (上級)	MA	—	—	—	△	—	○
マドラッサ	MA	▽	—	—	▽	—	○
英語フリースクール*	E	○	—	—	—	—	△
SITC師範*	M	○	—	—	—	△	—
政府中等学校	M	○	—	—	△	△	—
政府宗教学校	M	○	—	▽	○	○	—
ABIM中等学校**	M	△	—	(▽1)	○	—	—
ダールルアルカム中等	MA	△	—	—	△	—	○
UM/UPM	MA	○	△	—	△	△	—
USM	M	○	○2)	—	△	△	—
UKM/UTM/UUM	M	○	◎3)	▽4)	△	△	—
国際イスラム大学	EA	—	○	◎5)	○	—	—
ISTAC	EA	—	○	◎5)	○	—	—

註：M:マレーシア語，E:英語，A:アラビア語，イスラム科学:イスラムの視点による科学，○:必修，△:個人選択，▽:一部校のみ，▽1):1995年より一部校で導入，○2):ムスリム必修，◎3):全学生必修，▽4)UKMについて確認，◎5):「知識のイスラム化」の視点による統合科目，*:植民地期カリキュラム，**:同胞基金(Yayasan Anda)校，STIC:スルタン・イドリス教員養成学校，UM:マラヤ大学，UPM:マレーシア農科大学，USM:マレーシア理科大学，UKM:マレーシア国民大学，UTM:マレーシア工科大学，UUM:マレーシア北部大学，ISTAC:国際イスラム思想文明研究所(大学院)

が、独立間もなく、近代的な環境での実績の浅いマレーシア語の成長と、それを核にしたマレーシアの国民統合の阻害要因になるという理由からであった。

国際イスラム大学の設立のために、私立大学の設立を事実上禁止した1971年の大学および大学カレッジ法が改正されたことは、これらの法律が国益を代表するというよりは、特定のグループの利益の便宜のためにあるという印象をあたえた。英語やアラビア語に流暢なイスラム教徒が数多く出現することは望ましいことではあるが、高等教育までのすべての教育をマレーシア語で行おうという、これまでの高い理想と教育関係者の努力は、いともあっさり突然投げ捨てられたかのように映る。

また一般の国立大学で「イスラム文明」やイスラム的視点にたった科学のコースなどが非ムスリムにまで必修化されることは、信教の自由に抵触しかねない重要な問題であるが、これまでの華人やインド系の反応は、イスラム銀行やイスラム法の問題のときほどの関心は見られない。これはひとつには、「イスラム文明」といった科目名が他の文化史の授業のような歴史知識のコースのような印象を与えること、そしてマレーシアのこれまでの民族対立の経緯から、非マレー系は自分たちの直接の政治的・経済的・人事的権益が侵害されないかぎり、イスラムの問題はできるだけ触れずにすませたいという、逃避的な傾向が見える。またその延長線上で、国民統合に直接かかわる問題でありながら、非ムスリムによる近年のイスラム運動・思想についての研究がかなり立ち遅れているという印象を与える。

しかし国際イスラム大学の設立などによって、より深刻になりかねない大きな問題は、マレー人グループ自身の内部でのイスラム性とマレー性(Malayness)の乖離の危機であろう。連邦憲法によれば、「マレー」とは「イスラム教を信仰し、習慣的にマレー語を話し、マレーの習慣に従う者である」とされている⁽⁶⁸⁾。これによれば、民族的には華人やインド系であっても、イスラムに改宗しマレー語やマレーの風習に親しめば、その人は「マレー」と見なされ、逆にマレー人の家系に生まれても、その生活がきわめて西洋化し、英語を日常の会話に用いるような人は、もはや「マレー」とは見なされなくなる。

例えば、国際イスラム大学の歴史・文明学科で開講している授業40クラスのうち、イスラム史関係11クラスに対して、マレーシアの歴史が2クラス、マレー世界が1クラスにすぎない⁽⁶⁹⁾。今後、国際イスラム大学やイスラム伝道運動系の学校の卒業生や中東イスラム教育機関への留学生などが増加すると、同じイスラム教徒であっても、特に世俗

的な生活を敬遠し、イスラムの原初的生活に忠実な者で、日常的にアラビア語を話す者が相当数出現することが予想される。もしこれらの人々に、上記の定義を当てはめれば、こうしたイスラム主義者は「マレー」という範疇からはずれることになる。イスラム教はマレーシア・マレー人の97%が信奉する宗教であり、イスラムの強化はマレー人の地位の向上と保護につながるものと考えられてきた。しかし上述のようなアラブ型イスラムへの傾斜が強まれば、「マレー」とイスラムの乖離が発生し、ひいてはマレー系の人々の分断化が進む可能性がある⁽⁷⁰⁾。

さらにこの乖離は政府に政治的なディレンマを加えることになる。マレーシア政府与党を構成するマレー系政党である統一マレー人国民組織（UMNO:アムノ）は、これまでマレー人社会の権利の増進という民族政党の立場と、多民族社会を調整する政府与党という立場のディレンマに立たされてきた。しかし実際には国際的な視野でのイスラム化が強調されれば、民族政党としてのマレー・ナショナリズムの圧力とイスラム教徒をかかえる政党としてのイスラム主義の圧力は分離して、3重のディレンマに苦しむことになる⁽⁷¹⁾。

「マレー性」とはマレー・ナショナリズムと密接な関係があるが、唯一のイスラム世界（Ummah）への統合を目指すイスラム教にとって、ナショナリズムは植民地主義の遺産であり、イスラムの普遍主義（universalism）に対立するものであると捉えられてきた。モーリシャスのガリア（Garia:1986）は次のように述べている：

「(ナショナリズム)はイスラム諸国に人工的な国境を引くことによって、その教えの説く、ひとつのイスラム的ウマへの融合を妨害するという点で悲劇的である。従って、政治的武器としてのナショナリズムは、人間を自己中心的にさせ、多数の犠牲のうえに少数の福利を追求し、世界の資源の搾取と略奪を永続化するのである⁽⁷²⁾。」

ワット・モンゴメリー（Wat Montgomery:1961）の言うように、イスラムは様々な部族、宗教、文化グループを国内に包容して統合する寛容性と統合性を持っている。しかし伝統的なイスラム国家の統合性とは、異教徒は税金（Kharaj）を払うことによって保護を認められるという分離型統合であり、近代国民国家の目指す、意識のうえでの国民性の育成とは全く別のレベルである⁽⁷³⁾。マレーシア政府は、その是非は別にしても、教育を第一に国家統合の手段、すなわち民族的には結果の平等を実現するための機関として位置づけ、個人の社会的上昇や国際的な学術的卓越性の実現を目指す機能には低い優先性しか与えてこなかった。教育は国民の意識を変革し、新たなマレーシア人を生み出す平和的で、最も有効な手段であるという、政府の認識は、おそらく国際イスラム思想・文化研究所（ISTAC）の教員の次のような発言とは真っ向から食い違うことになるだろう：

「イスラム研究機関としての国際イスラム思想・文化研究所は社会経済的、政治的発展における国家の利益を代弁する道具であってはならない⁽⁷⁴⁾。」

[補遺] 前編の73頁の Qureshi の数式について、数値に若干の違いはあるが、同様の分析について論証過程を入手したので以下に掲げる。（第一著者は同一人物と思われる）

出典：Mazhar Mahmud Quraishi, Sayid Maqsum Ali Shah, 1989, "The Role of Islamic Thought in the Resolution of the Present Crisis in Science and Technology", 「現代科学技術の危機に対処するイスラム思想の役割」 in IIIT, *Toward Islamization of Disciplines*, Virginia, USA
集団礼拝とその褒賞に関する分析 (pp.98-106)

集団礼拝とその褒賞に関する啓示には次のようなものがある。Hadith より：

「アッラーは小さな祈りの集団より大きな祈りの集団をお好みになる」

Qubath bin Ashyam Al-laithi によるナレーション (Tabrani and Bazzaz) より：

「ひとりを導師 (imam) としてふたりが礼拝 (salah) を同時に行えば、4人が個々に礼拝を行うほどにアッラーは喜ばれる。同様に4人が集会 (Jama'ah) をもって礼拝を行えば、8人がそれを個々に行う以上にアッラーはお喜びになる。さらに8人が集会をもって礼拝を行えば、アッラーはそれを100人が個々に行った以上にお喜びになる。」

この章句から礼拝集会に参加する人数 N とそれによって得られる褒賞 (sawab) の総量 R と個人当たりの量 R/P

についての関数を考える。もっとも単純な関数としてはNに関する指数関数（厳密には不等式）：

$$R = f(N) = aN^x \dots\dots\dots (1)$$

を想定する。ひとりの礼拝による褒賞量の相対値を1単位とすると、

$$N = 1, R = 1; N = 2, R \geq 4; N = 4, R \geq 8; N = 8, R \geq 100$$

より、両対数目盛方眼紙に4点をプロットすると、およそ $a = 1, x = 2.22$ が得られる。

$$R = f(N) = N^{2.22} \dots\dots\dots (2)$$

ひとりあたりが得られる個人褒賞量は(2)式をNで除して

$$RP = N^{2.22} / N = N^{1.22} \dots\dots\dots (3)$$

しかし、礼拝の集団がきわめて大きくなると、最終的には集団内の結合力が弱まり、これほどの急激な褒賞量の増加は見込めず、むしろいつかは極大点に達すると考えられる。これを暗示するhadith (Bukhari, Muslim, Abu Dawood, and Tirmizi) の章句には、Abu Huraiah (RA) のナレーションより：

「集団による礼拝の（褒賞）は25回の倍加がなされる。（the salah with Jama'ah is increased/doubled twenty-five times）」

これを集団褒賞量の最大値と考え、一人の礼拝の褒賞量の2の25乗倍と見なすと、

$$2^{25} = 33,554,432$$

となり約3千3百万単位となる。これを(2)に代入すると

$$N^{2.22} = 2^{25} \dots\dots\dots (4)$$

$$N = 2,450$$

また(2)式が人数 $N = 0, R = 0$ から増加し極限值1をとるような関数をこれまでの類似の事象についての筆者の研究より導かれた関数から援用すると：

$$R = N^{2.22} / (1 + N^{2.22}) \dots\dots\dots (5)$$

極限值が 2^{25} をとるためには

$$R = 2^{25} \cdot N^{2.22} / (1 + N^{2.22}) \dots\dots\dots (6)$$

この式はNが1のとき極限值の1/2、すなわち 2^{24} をとる。この関数が N_0 で 2^{24} をとるように変形すると：

$$R = 2^{25} \cdot \left\{ \frac{N}{N_0} \right\}^{2.22} / \left[1 + \left\{ \frac{N}{N_0} \right\}^{2.22} \right] \dots\dots\dots (7)$$

$N_0^{2.22} = 2^{25}, N_0 = 2,450$ を(7)式に代入すると

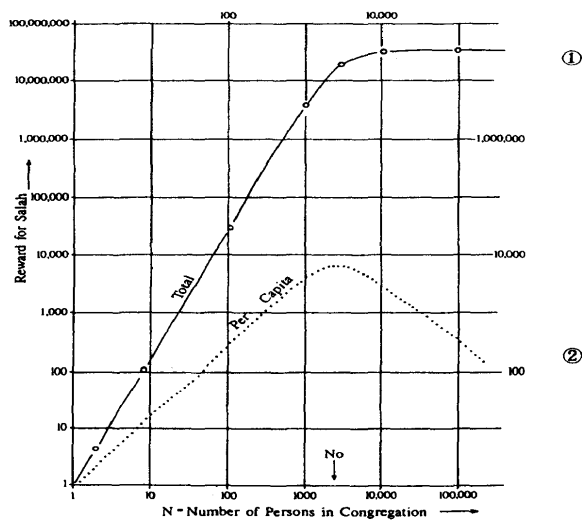
$$R = N^{2.22} / [1 + (N/2,450)^{2.22}] \dots\dots\dots (8)$$

これは下図（両対数グラフ）の実線曲線①（右上がり）にプロットされる。

ひとり当たりの褒賞量については(8)式をNで除して

$$RP = N^{1.22} / [1 + (N/2,450)^{2.22}] \dots\dots\dots (9)$$

この関数を二次曲線にプロットすると $N \approx 3,000$ で最大値 約8,000単位を取ることがわかる(下図破線曲線②)*。



以上のように集団礼拝をおこなうモスクのサイズは3,000人を最適な規模とすることが示されているが、実にイスラム史におけるよく知られた偉大なモスクの多くがこの人数のオーダーで収容能力をもっているのである。またこの式はモスクの近隣に住む人口のサイズをも規定することになる。

このような研究はイスラムのイデオロギーとダックワの過去の実践が、いかにして超人的な行為を可能にするようなタイプの間を生み出すことができたのかについて説明するのに有効である。イスラム史における典型的な例として、ハーリド・ワリード (Khalid ibn Walid) に率いられた60人の男が60,000人に打ち勝ち**、武器を持たない313人がバドル (Badr) において武装した千人の敵に打ち勝ったことなどがあげられる***。このような一見驚くべき出来事にも、以上のような科学的根拠に基づく説明が可能なのである****。

引用者註

- * 引用者(杉本)の検算では、 $No = 2,454.58$ 、 $RP = N^{1.22} / [1 + (N/2,454.58)^{2.22}]$ 、これを最大にする自然数Nは2,682～2,686で最大値 $RP = 6,868.76$ をとる。
- ** ウフド (Uhud) の戦い (紀元625年)。ムハammadの命に反したイスラム軍がメッカ軍と遭遇し、ようやく優勢に転じた時、メッカ軍の少数の騎馬隊に攻撃され、苦戦した戦い。神への不服従への罰、試練の例とされる。
- *** バドルの戦い (紀元624年)。ムハammadの率いるイスラム軍がアブ・ジャフルの率いるメッカの大軍に攻撃されたが、地の利を得たイスラム軍が少ない犠牲で撃退した戦い。信仰に対する神の恩寵の証の例とされる。
- **** この論文の評価、特にクルアーン、ハディース章句の解釈については、原典から英語への翻訳と引用者の日本的表現への転換による原意の歪曲の可能性を含めて、原聖典の参照が望ましい。それでもなお筆者としては、前号においても言及したとおり、日本も含めた西洋合理主義およびその実証主義的科学の観点からみた場合、その検証可能性の欠如のゆえに、この研究を「イスラム科学」と呼ぶことは困難であり、積極的にみても「イスラム研究」の範疇に留まると判断せざるを得ない。特に論文最後の飛躍的な implication に至っては「研究」という範疇にもそぐわないであろう。「イスラム科学」の名誉のためにも、この論文が最高のものではないことは記しておかねばならないが、劣悪なものをことさら取り出しているわけでもないこともまた事実である。「イスラム科学」がよりグローバルに受け入れられるためには、例えば今日の我々のかかえる現実の問題、とりわけ多くの人々が苦しむ医学的・全地球的の難題や方法論的限界に突き当たりつつある問題に対して、より積極的で、革新的な breakthrough をもたらす研究が登場することを期待したい。

出典および註

- (1) Letter from publisher, *Arabia*, November 1986.
- (2) *Fifth Malaysia Plan, 1986-1990*, 1986, Malaysian Government, p.30; 「国家教育哲学」については拙稿(杉本均) 前編「高等教育における科学と哲学：アジア・イスラム社会の視点—その1—」『京都大学高等教育研究』1995年創刊号、66頁参照。
- (3) Abu Sulayman, Abdul Hamid A., 1988, "Islamization of Knowledge: A New Approach Toward Reform of Contemporary Knowledge", pp.99-100, in The International Institute of Islamic Thought (IIIT), Islamization of Knowledge Series No.5, *Islam: Source and Purpose of Knowledge*, Herndon, Virginia, USA.
- (4) Ismail Raji al Faruqi, 1988, "Islamization of Knowledge: Problems, Principles, and Prospective", in IIIT *ibid.*, pp.26-27, イスラム的視点から見た知識・科学・文明については例えば: Sayid Mujtaiba and Rukni Musawi Lari, 1977, *Western Civilisation Through Muslim Eyes*, QUM, Islamic Rep. of Iran; Fadil Haji Othman, 1992, *Pendidikan Sains Teknologi dan Alam Sekitar Menurut Pandangan Islam*, Syeikh Publisher, Kuala Lumpur; Sulaiman Nordin, 1995, *Sains Menurut Perspektif Islam*, Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur など。
- (5) Al-Attas ed., 1979, *Aims and Objectives of Islamic Education*, Jeddah, pp.158-159.

- (6) Mahathir, *Utusan Melayu*, 1984, 10, 26.
- (7) *ASEAN Forecast*, 1983, p.70.
- (8) *Berita Harian*, 1988, 4, 24.
- (9) *Straits Times*, 1988, 4, 25.
- (10) Pro-Muslim Foreign Policy, Hussin Mutaib 1993, *op. cit.* pp.32-33.
- (11) Hussin Mutaib, 1993, *Islam in Malaysia: From Revivalism to Islamic State*, p.93, Singapore University Press, Singapore.
- (12) 1982年導入の新初等教育カリキュラムにおいて週150分(旧課程120分)、1988年導入の統合中等教育カリキュラムにおいて全教育時間の8%(旧課程では7%)のイスラム教育知識の時間が規定された。
- (13) Hj Abdullah Ishak, 1995, *Pendidikan Islam dan Pengaruhnya di Malaysia*, (Chapter 6, Institusi Pondok dan Pembelajarannya), Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur, pp.191-193.
- (14) スーフィズム(sufism: イスラム神秘主義)はウマイヤ朝初期以降、イスラム教徒の間に起こった反律法主義・反世俗主義の精神運動、その修行者の教団。粗衣をまとして禁欲的修行を積み、瞑想・神秘体験のなかに自己と神の一体化を実現するための秘伝密法。一部は靈感や奇跡を示す聖者として崇められた。(黒田壽郎『イスラーム辞典』1983、東京堂出版、より抜粋。)
- (15) *Ibid*, p.208.
- (16) 藤本勝次、1966年、「マラヤにおけるイスラム教育制度」、『東南アジア研究』、第4巻、第2号、2-39頁、京都大学東南アジア研究センター、同論文には1962年のケダ州バリンのMadrasah al-Khairiyah(生徒数319名)のカリキュラムも紹介されているが、それによれば低学年では地理、倫理、理科、健康教育、上級学年では教育原理、論理学、天文学などが教えられていた。(31頁)
- (17) *Legislative Council Proceedings, (Skinner's Report)*, 1873, Appendix 34, cited in Chelliah, D. D., 1947, *A History of the Educational Policy of the Straits Settlements from 1800-1925*, p.64, Federation of Malaya, Singapore.
- (18) Awang Had Salleh, 1979, *Malay Secular Education and Teacher Training in British Malaya*, p.92, (Malay Version p.98)
- (19) 藤本、1966年、『前掲書』、32頁。
- (20) Chai Hon-Chan, 1977, *Education and Nation-building in Plural Societies: The West Malaysian Experience*, p.68, The Australian National University, Canberra.
- (21) *Report of the Education Review Committee*, 1960, (Rahman Report), pp.47-48 ; *Education Act 1961*, 1961, Section 36, p.20.
- (22) *Sukatan Pelajaran Sekolah Rendah 1972, Jilid 1*, 1976, pp.2-5, Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur、マレーシア小学校のイスラム教育内容については、西村重夫、1990年、「マレーシアにおけるイスラーム教育の構造 —小学校用教科書の内容分析を中心として—」、『九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設紀要』、第40号、17-60頁に詳しい。
- (23) *Perangkaan Pendidikan di Malaysia (Educational Statistics of Malaysia) 1991*, p.33, p.63, Dewan Bahasa dan Pustaka.
- (24) Mohd Kamal Hassan, 1994, "The Influence of Islam on Education and Family in Malaysia," in Syed Othman Al-Habshi and Syed Omar Syed Agil eds., *The Role and Influence of Religion in Society*, Institute of Islamic Understanding Malaysia (IKIM), p.128.
- (25) Amaran Kasimin, 1982, "Sekolah Agama Rakyat Perlu Perancangan Sempurna", p.334, in Ibrahim Saad ed., *Isu Pendidikan di Malaysia*, Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur.
- (26) 1985年のプミプトラ(マレー系他先住民族)学生の比率72.5%より推定、*Fifth Malaysia Plan 1986-1990*, 1986, Malaysian Government, p.491.
- (27) Wan Mohd Nor Wan Daud, 1989, *op. cit.*, pp.109-111.

- 28) Al-Attas, 1972, *Islam Dalam Sejarah dan Kebudayaan Melayu*, Kuala Lumpur, Penerbit Universiti Kebangsaan.
- 29) Wan Mohd Nor Wan Daud, 1989, *op. cit.*, p.110.
- 30) フシン・ムタイブ (Hussin Mutaib, 1993, *Islam in Malaysia: From Revivalism to Islamic State*, Singapore University Press, Singapore) はマレーシアが「イスラム国家」に向かう場合の可能性についていくつかのパターンを想定している。彼によれば、現副首相のアヌワル・イブラヒムが政権を取った場合、もと ABIM のリーダーで PAS の要人とも交流があり、スルタンや政治腐敗に毅然とした態度を取る彼は、現政権の指導者のなかでは最も「イスラム国家」に近い政策を打ち出す可能性がある、という。(Ibid., pp.81-91) しかし当の本人は将来に「イスラム国家マレーシア」の建設を宣言する意図を否定している。(Ibid., p.93) これは多民族政権担当者としての立場もあれば、他のイスラム化「先進国」の混乱に接しての慎重な態度とも考えられる。いずれにせよムタイブは「マレーシアのイスラム再興運動家や原理主義者の期待や信念に反して、予測可能な未来にマレーシアに『イスラム国家』が現実に成立する蓋然性はないであろう。」(Ibid., p.90) と結論している。
- 31) Wan Mohd Nor Wan Daud, 1989, *op. cit.*, p.111.
- 32) Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.285, ABIM President, Muhammad Nor Monutty とのインタビュー。
- 33) Zainah Anwar, 1987, *Islamic Revivalism in Malaysia: Dakwah Among the Students*, p.18, Pelanduk Publications, Petaling Jaya.
- 34) *Educational Program for ABIM's Formal Education System* (n.d.) cited in Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.301.
- 35) Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.301, Ghazzali Basri とのインタビュー。
- 36) Sidek Baba, 1991, *The Malaysian Study Circle Movement and some Implications for Educational Development*, Unpublished Dissertation at Northern Illinois University, cited in Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, pp.294-295. 彼によれば末端レベルのウスラでは、個人の教育レベルの差が大きく、議論というよりも一方通行的なコミュニケーションになりがちであったという。
- 37) *Jurnal Pendidikan Islam*, Ahmad b. Muhammad Said (editor), Biro Pendidikan Angkatan Belia Islam Malaysia (ABIM), Kuala Lumpur.
- 38) Hussin Mutaib, 1993, *op. cit.*, p.40.
- 39) Zainah Anwar, 1987, *op. cit.*, p.24, pp.35-36.
- 40) Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.259.
- 41) Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.259, ケダ、クランタン、トレンガヌ、ブルリスの4州。
- 42) *Asiaweek*, 1994, 8, 17.
- 43) Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, pp.267-269.
- 44) *Strait Times* 1992, 3, 17.
- 45) 中澤政樹、1988、「JEMAAH TABLIGH : マレー・イスラム原理主義運動試論」、104頁、水島司編、『マレーシア社会論集1、多民族国家における異化・同化形態の比較研究』、東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所。他に中澤政樹『マレーシアにおけるイスラーム原理主義運動の動向』1991、イスラームの都市性研究報告、第96号、東京大学東洋文化研究所を参照。
- 46) Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.277.
- 47) Nagata, Judith, 1984, *Reflowering of Malaysian Islam: Modern Religious Redicals and Their Roots*, Vancouver, University of British Columbia Press, p.112.
- 48) Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.279.
- 49) Muhammad Mumtaz, Ali, 1995, "Introduction: Contemporary Movement of Knowledge in the Muslim World - A Retrospect", in Muhammad Mumtaz ed., *Conceptual and Methodological Issues in Islamic Research: A Few Milestones*, p.28, Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur.

- ⑤0 Al-Attas, Syed M. Naquib, 1978, *Islam and Secularism*, Kuala Lumpur, cited in *ibid.*, p.34.
- ⑤1 Al-Attas, 1973, *Islamic Secretariat*, Jeddah, Saudi Arabia にあてた手紙 cited in Wan Mohammad Nor Wan Daud, 1991, *The Beacon on The Crest of a Hill*, Kuala Lumpur.
- ⑤2 Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.241, Ghazzali Basri とのインタビュー。
- ⑤3 国際イスラム思想研究所 (The International Institute of Islamic Thought= I I I T) は1981年にバージニア州ヘルンドン (Herndon) に設立された、イスラム思想の再興と「知識のイスラム化」を目指す社会科学系イスラム研究者の研究機関で、マレーシアには国際イスラム大学内に支部を置いている。前述の国際イスラム大学やその附属の大学院研究機関、国際イスラム思想・文明研究所 (I S T A C) と密接な関係がある。多くの英語・アラビア語の出版物の他『アメリカイスラム社会科学雑誌 (*American Journal of Islamic Social Science*)』(英語誌) を刊行している。
- ⑤4 *International Islamic University Malaysia, Establishment of the University*, 1991, unpublished Brochure, pp.3-4, IIUM.
- ⑤5 *Newsbulletin International Islamic University Malaysia*, 1995, April-June, p.3 によれば西海岸クアタナン (Kuantan) の新キャンパスには医学部が開設予定で、すでに学部長、スタッフ人事が内定しているという。Anne Sofie Roald (1994, *op. cit.*, pp.242-243.) が1991年11月に行った、IIU医療顧問、保健センター長、ヤハヤ・アルビ (HM.D.Muhammad Yahya Alvi) とのインタビューによれば、新医学部では、ナービー医療* (Prophetic Medicine=at-tibb an-nabawi) を含む様々な分野での研究を計画している新しい医学部キャンパスが開設されている。
- * ナービー医療とは、預言者モハammad自らが用い、その使徒にも用いるように勧めた医学療法 (medical remedies) である。そのための薬品には蜂蜜、オリーブ油、酢および黒キャラウェイの実 (black caraway-seed: habbat as-sawda' or habbat al-baraka) が用いられる (*Ibid.* p.243, 註1)。
- ⑤6 'Characteristics of the International Islamic University', in IIUM, 1991, *op. cit.*, p.5.
- ⑤7 Ahmed Husaini, S. Waqar, 1985+, *Teaching Islamic Sciences and Engineering : International Comparisons, and Case Studies from King Abdul Aziz University*, no information on publisher, Kuala Lumpur.
- ⑤8 Admissions and Record Division, IIUM, 1995/96, における提供情報。
- ⑤9 *International Islamic University Malaysia, Establishment of the University*, 1991, Unpublished Brochure, p.6, IIUM.
- ⑥0 Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.247, 一般的なマレー語で 'kuliah' と称した場合は大学の授業・講義を指す。
- ⑥1 *Undergraduate Prospectus 1996*, International Islamic University Malaysia, pp.238-245, 博士号データは pp.241-242より集計。
- ⑥2 *Ibid.*, pp.139-140.
- ⑥3 Brochure by Student Affairs Division, cited in Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.243, アラビア語で 'usrah' とは family すなわち、ちいさな学習グループを指す。
- ⑥4 Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.245, Anis Ahmad 教授とのインタビュー。
- ⑥5 *Ibid.*, pp.244-245.
- ⑥6 *Ibid.*, pp.246-251.
- ⑥7 マレーシア国際イスラム大学、イスラム啓示科学および遺産学部のロウアイ・サフィ (Louay Safi) 助教授 (人間科学) は、筆者とのインタビューで、「大学機関として特定のイスラム科学の学派や哲学を支持したり、推進しようという意図はなく、イスラム全体の興隆に貢献し、さらにはイスラムだけではなく、精神世界を重視する世界の思潮と対話を持ちたい」と話していた (1996,4,2)。
- ⑥8 *Federal Constitution of Malaysia*, Article 160(2), (p.154), International Law Book Service.
- ⑥9 *Undergraduate Prospectus 1996*, IIUM, *op. cit.*, pp.130-139.

- (70) Azizah Haji Baharuddin, 1990, "Konsep kemelayuan menurut perspektif teologi, sains dan falsafah", pp.209-214, in her *Science and Belief: Discourses on New Perspective*, Institute Kajian Dasar, Kuala Lumpur, 例えはマレー服とイスラム服の区別はその象徴的な問題である。マレーシア政治集団におけるマレー性とイスラム性の分析については、田村愛理(1988)、「マレー・ナショナリズムにおける政治組織とシンボル操作——イスラームをめぐる政治集団形成の分析——」、『アジア経済』第29巻、第4号、2-26頁、に詳しい。
- (71) Hussin Mutaib, 1993, *Islam in Malaysia: From Revivalism to Islamic State*, p.106, Singapore University Press, Singapore.
- (72) Murtaza Garia, 1986, "Chapter II, Nationalism in the Light of the Qur'an and the Sunnah", p.27, in M. Ghayasuddin ed., *The Impact of Nationalism on the Muslim World*, The Open Press, Penerbit Hizbi, Shah Alam, Malaysia.
- (73) Montgomery, Wat, 1961, *Islam and the Integration of Society*, pp.87-94, Routledge & Kegan Paul, London.
- (74) Wan Daud, Wan Mohammad Nor, 1991, pp.21-22, cited in Anne Sofie Roald, 1994, *op. cit.*, p.249.